

合掌

自分の道を歩むこと。

6日の練習から帰ってテレビをつけると、ある番組で「AKB48」を取り上げていました。私は、あまりこういう「アイドル」ものには興味ありません(ん?今でもアイドルって使いますか?)。しかし、震災以後、この日本を元気づけているものの一つが、この「AKB48」と呼ばれる若い女の子の集団であることには間違いのないという思いがありました。だからでしょうか、なんとなくつけたテレビに、彼女たちが映っていたので、つい見入ってしまいました。

AKB48。今でこそ、国民的アイドルですが、初めからそうだったわけではないようです。デビューして5、6年は、コンサート会場にほとんど客がいない時期があったようですね。それでも、何曲も歌を歌わなければいけない。ガラーンとした客席に向かって歌い続けたり、笑顔を作り続けたりするのは、辛かっただろうと思います。街頭に立ち、自分たちで自分たちの舞台のピラを配る。しかし、それを目の前で捨てていく人もいたそうです。学校では、「秋葉原」という名前から、偏見の目で見られ、心無い言葉も浴びせられた子もいたようです。

武田鉄也さんも同じようなことを言っていました。「母にささげるバラード」が大ヒットした後、しばらく売れない時期があって、コンサートを開いても、大きなホールなのに、前の席に5、6人しか人がいない。心無い言葉をかけられることもあった。これは辛かっただ。それでも、自分たちを信じて続けてきたと。ご存知の通り、武田鉄也さんは、その後「金八先生」と「贈る言葉」で大ヒットします。そして今も、あの独特で、魅力的な話術には、いつの間にか引き込まれてしまいます。

書家の「相田みつを」さんをご存知の方多いと思います。先日、息子さんの相田一人さんの講演を聞く機会がありました。相田みつをさんが初めて本を出したのは60歳の時だそうです。そして、67歳で亡くなりました。何十年という長い間、ひたすらに書き続け、それがやっと世の中に認められたのは、その晩年になってからだったということです。私も、彼の本に出会ったのは彼が亡くなってからでした。相田一人さんが言っていました。自分が学校から帰っての毎日の仕事は、父みつをさんがその日に書いた書を燃やして風呂を沸かすことだったと。毎日、山のようになった紙を燃す。風呂が沸くくらいあるというのですから大変な量ですね。

共通して言えること、それは、自分の“道”をただひたすらに歩み続けたということだと思えます。ひたすらというのは、何もしないでいたということではありません。そこには、日々研鑽、たゆまぬ努力があるということです。時には迷い、時にはへこたれることもあります。それでも、自分の好きな事、やりたいことを、諦めずに努力し続ける。それが、実を結んだということです。

しかし、世間に認められたから成功したということではありません。社会に知られなくても、自分の道を自分なりに歩み続けることができれば、それは素晴らしいことですし、自分の道をしっかりと歩いている人は、いつの時代も輝いています。そして、周りの人たちに何かしらの影響を与えています。なぜでしょうか。それは、自分の道を歩き、努力した人は、自分を大切にしているからだと思えます。自分を大切にする、それは、自分の“命”を大切にするということです。つまり、“命”の、“生きる”ということの大切さ、尊さを知っているのです。だから、他の人の命の尊さも分かる。自分の道を歩むとは、決して、自己中心的な事ではないのです。

AKBのメンバーも、武田鉄也さんも、相田みつをさんも、その道は決して平たんではなかった。辛く苦しい道を歩いてきたから、同じように、自分の道を歩こうとしている人たちの苦しみや悲しみも分かる。だから、自分たちのことだけでなく、他の多くの人たちへの思いやりや優しさとうものが、彼ら、彼女らの生き方に、在り方に、自然と現れ、それが、社会で受け入れられてくるのではないかと思うのです。少林寺拳法の「愛と慈悲心、勇気と行動力を持った自己を確立すること、半ばや自己の幸せを、半ばは他人の幸せを考え、豊かで平和な理想境を作ろうという自他共楽の教え」は、こうしたこととも通じるのだらうと思えます。

アントニオ猪木さんが言っています。「この道を行けばどうなるものか、危ぶむなかれ。危ぶめば道はなし。踏み出せばその一足が道となり、その一足が道となる。迷わず行けよ。行けばわかるさ。」

自分の道を歩み、自分の命を生きること、これが、自己確立と自他共楽への第一歩です。

結手